汗が、その碑文の冒頭で、突厥の民にたいして、中国人の「甘き」言葉にあざむかれぬよう警告したつぎの一句「甘きその言に、柔らかきその絹布に欺かれて、多きテュルクの民、死せり汝!……その地(中国)に行かば、テュルクの民よ!死せん汝!」を引用して、序文をしめくくっているのである。政治が学問に優先するお国柄とはいえ、このような学術論文集の中にまで中ソ対立の色濃い影を見て、その根の深さを感じないわけにはいかない。

註

(1) 同研究所については、加藤九祚「ユーラシア学の旅」(『ユーラシア』八、一九七三)、菊池俊彦「シベリアの考古学研究所を訪ねて」(『北大史学』一六、一九七六)にくわしい。

(2) Центральная Азия и Тибет. Новосибирск, 1972.

(3) А.Г.Малявкин. Материалы по истории уйгуров в IX–XII вв. Новосибирск, 1974.

(4) Сибирь, Центральная Азия и Восточная Азия в древности. Новосибирск, 1976.

(5) Т.И. Калинина. Керамика культуры яншао. Новосибирск, 1977.

(6) なお同刊本の「天祚帝紀」のロシア語訳が、同じ筆者らによって発表されている(Л.В. Тюрюмина, В.Е. Ларичев, Е.П. Лебедева, Гибель империи Ляо.《Бронзовый и железный век Сибири》(Древняя Сибирь, вып. 4). Новосибирск, 1974, сс. 225–260.)。

Сибирь, Центральная и Восточная Азия в средние века (История и культура востока Азии, том III), Новосибирск, 1975, 236 стр.

批評と紹介　辻

ヴァースデーヴァ・アーシュラマ著、
P・オリヴェル出版・翻訳

ヤティダルマ・プラカーシャ

(遁世者の生活規定)

辻　直四郎

本書は二部からなり、第一部(以下 Pt. 1 と呼ぶ)は序文(p. 15–28)とサンスクリット本文(p. 29–109)のほか、三種の附録、索引を載せ、第二部(Pt. 2)は序文(p. 19–51)と英訳(p. 53–205)ならびに二種の附録、索引を含んでいる。

現世を厭離して出家遁世することは、インドの大宗教のいずれにも見られる風習である。仏教およびジャイナ教については、周知の事実であり、文献も豊富に存するから、すで

にしばしば研究の対象とされてきた。バラモン教においても、教徒の生活の第三期は林棲期、第四期は遊行期と呼ばれ、共に俗世活からの厭離を特徴としている。本書の題名に用いられているヤティ（yati）は、正にこの隠遁・遊行者（saṁnyāsin）を意味する。しかしバラモン教の系統に属する典籍の出版・研究は非常に少い憾みがあった。今オリヴェル博士により代表的作品が批判的に出版され、的確に英訳されたことは、この方面の一大収獲である。

著者ヴァースデーヴァの伝記の詳細は全く不明であるが、出版者の研究に従えば、おそらく1675～1800 A.D. の間に生存したと思われる(cf. Pt. 1, p. 18)。遁世者としては、"the āśrama subdivision of the 'renouncers of the ten names' (daśanāmiṇaḥ, cf. Pt. 1, p. 99, Pt, 2, p. 187) of the Advaita Vedānta tradition, reputedly founded by the great Śaṁkara" に属していた (cf. Pt. 1, p. 17)。

本書の出版には六本の写本が精査され(cf. Pt, 1, p. 19-23) 厳正な比較検討が加えられ (cf. ifid., p. 27-28) 批判的出版としては、現在これ以上を望むことはできない。

ヤティダルマ・プラカーシャ（以下Yと略す）の特徴は明瞭(clarity)にあるという(cf. Pt. 2, p. 26)。本書の出版・翻訳者もこの点においては原著者にゆずるところがない。原書は章節・段落の区分をもたないため、出版者は内容に即して全体を七三パラグラフに分割し、番号を附して引用の便を計っている。その労は多とすべきである。従ってYの内容を伝えるためには、オリヴェル博士による第一部（出版）および第二部（翻訳）の序文の要点を、簡単に紹介するのが最もよい方法である。

一、遁世文学におけるYの地位(Pt. 2, p. 21-28)。この種の文献はすでにパーニニの知るところであったが（cf. Paṇ. IV. 3. 110, 111)、その内容は知られていない。現存する文献を列挙・分類して考察した結果、Yがもっぱら遁世を主題とする特殊文献の一種であることは明らかである (cf. ibid., p. 25)。Yの資料は広くヴェーダならびにスムリティ文献にわたり、おびただしい数の引用に満ちているが、ヴァースデーヴァの精通していたのはむしろ中世のダルマ文献であった。哲学書としては、シャンカラに帰せられる Pañcākaraṇa が最も重要な典拠をなし、またヴァースデーヴァに最も大きな影響を与えたアドヴァイタ・ヴェーダーンタ学者は、Madhusūdana Sarasvatī (1540～1647) であった (cf. Pt. 2, p. 28)。

二、Yの構成と内容(Pt. 2, p. 28-51)。主要内容は次の五項に分かつことができる(ibid., p. 29, cf. Pt. 1, p. 7-9)。ここには出版者による段落を示し、主題を表すサンスクリット語(cf. Pt. 1, p. 7-9)を添えることとした。

(一)遁世に関する予備的論議(§§1–4, saṁnyāsanirūpaṇam)
(二)遁世への手続法(§§5–21, saṁnyāsagrahaṇaprakāśaḥ)
(三)遁世者の日々の行事(§§24–50, āhnikanirūpaṇam)
(四)遊行と雨期の安居(§§60–65, paryaṭanam)
(五)雑件(§§66–72, yogapaṭṭavidhiḥ, etc.)
なお §§22–23, §§51–53は短い附録をなしている(cf. Pt. 2, p. 29)。

これらの五項目はそれぞれさらに細分されて説明されているが、今はその詳細を省き、特に注目すべき事項若干を挙げるに止める。

(一)の項下でまず重要なのは、遁世の定義である(Pt. 1, § 1, line 1–2)。一般の読者のため、正確を期して次に翻訳を掲げる。"Renunciation is the abandonment of rites known through injunctions—the *śrauta* and *smārta*, the permanent, occasional and optional—, after reciting the praiṣa ritual formula"(Pt. 2, p. 55–56) これによれば遁世者ヤティはあらゆる祭祀を棄てねばならない。文中の praiṣa とは "saṁnyastaṁ mayā"(I have renounced) という文句を指す(cf. Pt. 2, p. 31, p. 42–43)。すべての真言(mantra)を捨離して、口にするのはただ聖音 oṁ のみである。なお oṁ については、Pt. 2, p. 139–143参照。

遁世者の分類(Pt. 1, § 4, cf. Pt. 2, p. 34–37)に関する見解は、古来必ずしも統一されていなかったが、ヴァースデーヴァの時代においても、最高級のパラマハンサ(Paramahaṁsa)のみが現実に存在したらしく(Pt. 1, § 5, line 2)、パラマハンサの理想は真智の探求にあった。

(二)に属する諸題目の中、特に注目すべきは、宗教的自殺(mahāprasthāna "the great journey", Pt. 1, § 17, line 3, § 21, line 115, Pt. 2, p. 39, p. 43, cf, p. 96–98)を認めている点である。その起源・可否・実態は論議の的となっているが、実際にはほとんど実行されなかったと考えられる。この問題に関しては、近代学者の論著も少くないことを附記する。

最後に(五)の項下で、カリ・ユガ(黄金時代等のユガ説の最悪時代、現代もこれに属する)における遁世の可否についての論争に触れている。ヴァースデーヴァはもちろんこれを許容する立場をとり、学徳ある者の行為(śiṣṭācāra)こそ、遁世を認めさせるための最良の権威であると述べている(cf, Pt. 1, § 72, line 29–30, Pt. 2, p. 50–51)。

一七世紀後半に属するYの言語には、少数の例外を除き、特筆すべき点がなく(cf, Pt. 1, p. 28)、文体は概して平明である。訳文も流暢でよく意を尽している。両部の巻末に添えられた諸種の附録および一般索引は、いずれも有益で、本書の利用価値を高めている。冒頭にも述べた通り、パラモン

教系の遁世文献の学術的出版・研究が少い現時において、本書の出現は大いに歓迎すべく、これを推奨するに躊躇しない。

(Vāsudevāśrama Yatidharmaprakāśa. A treatise on World Renunciation. Critically edited with introduction, annotated translation and appendices. Publications of the De Nobili Research Library, ed. by G. Oberhammer, Vol, iii. 2 pts., Vienna 1976, 1978.)

イブネ・ムハムマド著
ジョン・オケイン訳

スレイマーンの船

北川誠一

一

ペルシャ文学の十九世紀は紀行文の時代であった。外国旅行記に限ってもたちどころにミールザー・サーレフ・シーラーズィーMirzā Ṣāliḥ Shirāzī の『旅行記 Safar-Nāma』、ザイヌルアービディーン Ḥāji Zain al-'Ābidīn Shirvānī の数編の浩瀚な旅行記、ミールザー・フサイン Mirzā Ḥusain によって記されたファルフ・ハーン Farrukh Khān Amīn al-Mulk の英仏滞在録、三度にわたるヨーロッパ旅行を行ったナースィルッディーン・シャー Nāṣir al-Dīn Shāh (在位一八四八—九六年) の旅行記等々の名を挙げることができるのである。立憲革命期にミールザー・ハビーブ Mīrzā Ḥabīb Iṣfahānī のペルシャ語訳によるモリエール James Morier の『イスパハンのハッジ・ババの冒険 "*The adventure of Hajji Baba of Isfahan*"』、ザイヌルアービディーン Zain al-'Ābidīn Marāghaī の『イブラヒーム・ベグの旅行記 "*Siyāhat-Nāma-i Ibrahīm Big*"』等の旅行記に仮託した小説が読まれたのも前の時代に紀行文学が盛んになっていたからであろう。

ところで、紀行文学は十九世紀に突然おこったのではなく、これに先だつ数世紀の間にいくつかの勝れた旅行記が書かれている。サファヴィー朝の皇帝シャー＝スレイマーン・サフィー Shāh Sulaimān Ṣafī (在位一六六六—九四年) が、タイ・アユタヤ朝のプラナライ Phra Narai 王 (在位一六五七—八八年) のもとに遣した使節団の書記イブネ・ムハムマド Ibn-i Muḥammad Ibrahīm Muḥammad Rabī' の記した『スレイマーンの船』"Safīna'-i Sulaimānī" は、その一つである。

一六八二年サファヴィー朝の宮廷にアユタヤ在住のイラン